ショルダー

少年の心に理想の女性像を刻み込んだ永遠の美女

美しき母メーテル

『銀河鉄道999』のメーテルは、実の母親ではないが鉄郎にとって母のような存在だ。慈愛に満ち、強く、鉄郎を見守り続ける。そして何よりもその美しさに、昭和40年男は憧れた。メーテルのモデルとなった美女について、そして自身の母親について、原作者・松本零士に話を聞いた。

取材・文・構成：小林良介　撮影：小林岳夫

©松本零士

『銀河鉄道999』の連載が『少年キング』誌で始まったのは1977年のこと。テレビアニメは翌78年から81年まで、つまり昭和40年男にとっては13～16歳という時期に放映されていたことになる。また、ゴダイゴが主題歌を歌った映画版は79年の公開だ。原作やテレビ版では10歳の子供だった主人公・星野鉄郎は、この映画で14歳という設定となった。そしてまさにこの年、昭和40年男は14歳。999を思い返す時、この映画の方が強く印象に残っている方も多いだろう。

あの作品に触れた当時の少年は皆、メーテルに恋をしていた。美しく、強く、そしてすべてを包み込んでくれるような優しさをもったメーテルは、今でも恋焦がれてやまない憧れの対象だ。鉄郎はメーテルと旅をしながら、時にメーテルに守られ、時に力強く彼女を守る。鉄郎がメーテルのなかに、母と、恋人のイメージを見ていたように、我々もまた彼女に対して、限りない母性と、性的な欲求の両方を感じていたはずだ。生涯にわたる理想の女性像を植えつけられたと言っても過言ではない。

メーテルのモデルとなった実在する数多の美女たち

メーテルのモデルについて、原作者の松本零士は、これまでさまざまな人物の名を挙げている。高校時代に憧れ、自ら描いた似顔絵を学生証の裏側に入れてお守りがわりにしていたという、八千草薫。映画『風と共に去りぬ』のスカーレット・オハラや、『我が青春のマリアンヌ』のヒロイン、マリアンヌ・ホルト。加藤登紀子や、高校時代の同級生の名を挙げていた時期もある。そして2000年に入ると、父方の親族に、松本の描く美女にそっくりな女性がいることが判明する。それはちょうど、松本が生まれた1938年に亡くなった楠本高子という女性で、シーボルトの孫娘だという。その銀板写真が、偶然に菩提寺から発見されたのだ。ほっそりした輪郭と切れ長で大きな目、端正な鼻筋や口元など、確かに似ている。しかも、写真の女性が着ている着物の柄は、松本が高校時代に描いた八千草薫のイラストと同じだったという。これについて松本は「無意識のうちに遺伝子が作動した」と語る。

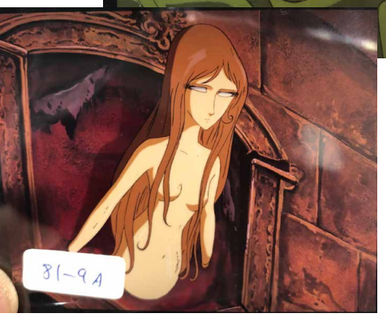
「人は決して一人ではない。何億年、何十億年も前からの先祖の思い、その遺伝子が自分の中に生きているから」

先祖の記憶は遺伝子に刻まれ、子々孫々に受け継がれていくものであると松本は考える。

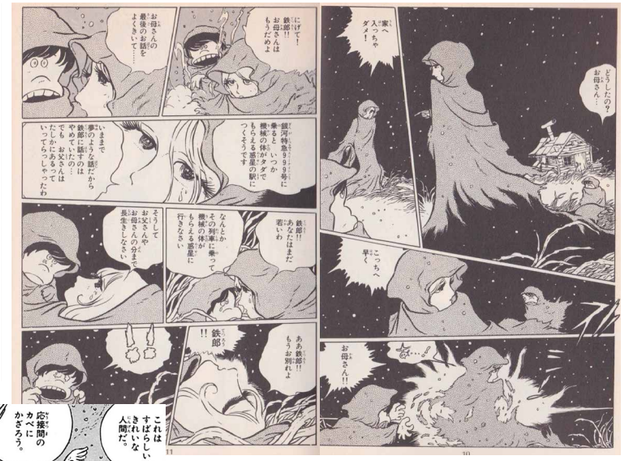
近年発見された松本の親類、楠本高子の銀板写真

『我が青春のマリアンヌ』で主演を務めたドイツ女優、マリアンヌ・ホルト

©松本零士・東映アニメーション



©松本零士



寒い夜、雪の中を逃げる母子。原作・アニメとも、その第1話で、鉄郎の実の母親は機械伯爵に撃ち殺されてしまう。そして、伯爵を倒し、機械の体を手に入れることを鉄郎は誓うのだった。それにしても「人間狩り」なる単語には、子供ながらに恐ろしさを覚えたものだ

美しい母は機械伯爵の手で、はく製にされてしまう。映画版では全裸で描かれ、哀しみと同時にエロティシズムもいやましていた。「髪が長いと裸身を隠せて便利」とは、松本の弁

そしてもうひとつ。松本は18歳の時、マンガ家を目指して九州・小倉から上京し、やがて東京都練馬区の大泉に居を移した。そこには東映の撮影所があったことから、駅前の喫茶店には、撮影中の衣装のままコーヒーを飲む、女優の姿があったという。

「『何してるの？』と聞くと、『昼休みだから30分休憩』って。あらゆる女優さんに声をかけて、八千草さんも含めていろんな人に会えた。そういう人たちの影響も受けています」

つまりメーテルの造形美は、松本がこれまでに出会い、触れ合ってきた美女たちの記憶と、それ以前から体の中に刻まれている遺伝子の記憶、その両方の産物と言えるのかもしれない。

終戦の日、母は家じゅうの刀を並べ死を覚悟していた

そして、メーテルをはじめ松本が描く女性キャラクター像に大きく影響しているのは、なんといっても、松本自身の母親の存在だ。今回のインタビューで「きれいな方だったのですか？」と尋ねると、きっぱり「きれいで強い」との答えが返ってきた。「侍の子孫たるものが泣くなか、男子たるもの…など、武士道的なことをいつも言っていた」

武家の生まれである母親。その実家がある愛媛県に疎開していた松本は、この時アメリカ軍の戦闘機や、B-29など軍用機の大編隊を何度も目撃している。そしてグラマン戦闘機からの機銃掃射を受けた時には、母が覆いかぶさってかばってくれたという壮絶な経験も持つ。

「そういう母親だった」

さらに、日本が終戦を迎えた日の出来事は、今も松本の脳裏に強く焼きついている。

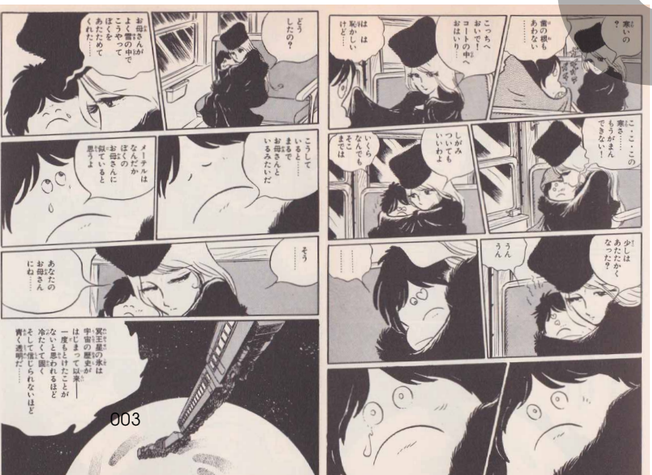
「昭和20年8月、7歳の時。近所の川で泳いでいたらおっさんがメガホンをもって『戦争が終わった』と叫んでいた。泡くって家に帰ったら、母が、家にある刀という刀を並べて床に座って磨いている。刀身に打ち粉を打つ母に『チャンバラでもするのか』と聞いたら『占領軍が来たらこの刀で、家族同士で刺し違えて死ぬ。侍の子なら覚悟をしろ』と言われた」

まさしく〝生きて虜囚の辱めを受けず〟という、軍人の行動規範そのものだ。幸いなことに一家が殺しあう事態にはならなかったが、戦後の生活は厳しい

実在する数多の美女と、遺伝子の記憶が結晶した。

冥王星に向かう列車の中で、メーテルに体を温めてもらう鉄郎。最初は美しい異性を意識して胸をときめかすも、やがてそのぬくもりに母を思い出し、涙ぐむ。メーテルがもつ母性と色香、両方の魅力が発露したワンシーンと言えるだろう

©松本零士



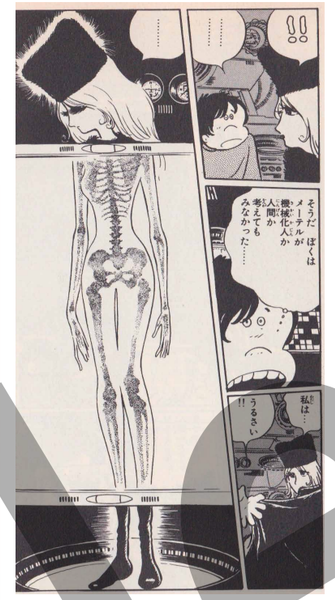
Sample

ものだった。戦時中は陸軍航空部隊のパイロットであった父とともに、野菜の行商をしながらの赤貧暮らし。元々は高学歴で出身家庭が恵まれていた母親が、苦労しながらも、周囲の嘲笑に歯を食いしばっている姿を見て「泣くな、母さん。俺がおる」と、松本少年は言ったそうだ。

強く、美しく、体を張って自分のことを守り、育ててくれた母。その母を守りたいという思い。少年時代の松本の姿はまるで、メーテルに対する鉄郎そのものだ。その鉄郎が汽車に乗って地球を離れるシーンもまた、故郷・小倉を離れて東京へと旅立つ松本の姿と重なる。

「それこそ999と同じような汽車に乗って、東京への行きの切符だけを持って。〝死んでも帰らん〟と心に決めて。見送りに来てくれた母は〝気をつけて、歯を食いしばって頑張れ〟と言ってくれた」

本州と九州を結ぶ関門トンネルはまさしくブラックホールのようなイメージであり、そこを抜けた先に見える下関は別世界のように感じたと松本は語る。



大盗賊アンタレスの手で機械化人かどうかを調べられるも、特殊な機能をもつカモフラージュランジェリーにより、難を逃れたメーテル。結局、彼女の体が機械か生身かは不明のままだ

「メーテルはなんだかこの世でいちばんやさしくてきれいなような気がする…」という鉄郎の言葉を受け、メーテルは下のように言う ©松本零士

「人生には、その汽車に乗らなければダメだったという一瞬が必ずある。志を遂げる一瞬が。それを実行するかどうかで、運命は変わると思う」

幻影でもお化けでもいいから絶世の美女を描きたかった

話をメーテルに戻そう。そもそもメーテルという名前は、『青い鳥』の著者モーリス・メーテルリンクから名前を取ったものだと、当時の松本は説明していた。しかし後になって、この言葉にはラテン語で「母」という意味があることが判明。これも、また、幼少期からさまざまな本を読み、学んできた経験がなせる業だ。無意識のうちに、メーテルをただの「憧れの美女」というだけではなく「母のイメージをもった美女」と定義していたとも言えるだろう。

そしてメーテルと、鉄郎の母が生き写しである理由としてはその時代や作品ごとに微妙な違いはあるが、現在では、次のような形で落ち着いている。

メーテルは鉄郎の母のクローンではなく、子孫。女海賊クイーン・エメラルダスとの双子であり、その母親である女王プロメシュームは『1000年女王』のヒロイン・雪野弥生。また、メーテルのボディが生身の人間なのか機械なのかについては、はっきりと描かれてはいない。

「人間関係の設定については、自然にそうなっちゃった。そしてとにかく、それが幻影でもお化けでもいいから、年上の絶世の美女を描きたかった。自分が鉄郎で、メーテルは憧れ。思春期の夢ですよ」

999だけでなく、キャプテンハーロックもエメラルダスも、少年の時からの夢を描いているのだと、松本は語る。

「観光船としての宇宙列車は必ず誕生するが、今はまだ夢。だから彼らは夢の中を旅している」

テレビアニメ版と、その物語をベースにした映画版。81年公開の映画『さよなら銀河鉄道999 アンドロメダ終着駅』。その後も『銀河鉄道999 エターナル・ファンタジー』や、さらなる続きを描いた『銀河鉄道物語』という作品も、松本は著している。直近では2018年にも、メーテルと鉄郎の新たなる旅立ちを短編で描いた。

「999の旅に終わりは来ない。終わらせたくない。終わると死ぬから、続けたい。まだ頑張っていく」

81歳を超えてなお、その創作意欲が衰えることはない。

「限りある命だから人は頑張るのであってね。機械の体になって無限に生きられるとなると、必ず無気力になる。永遠の命よりも、限りある命の方が大事なんだ。生きているうちに自分の思いを果たし、そして我が子の中に遺伝子は受け継がれるから、自分の思いは永遠に残る。ものすごい数の先祖の思いが自分の中に今生きていて、それが子供に受け継がれて先に行く。それが、〝永遠の命〟なんだ」

機械の体になって永遠に生きたいと願い、旅に出た鉄郎。しかし鉄郎は終着駅、惑星大アンドロメダで言った。

「ひとつだけはわかったよ(中略)父さんや母さんの血がぼくの体には流れている…ぼくの血だってぼくの未来の子供に受けつがれてそのまた子供へとずっと続いていく…それも永遠の命だってね!!」

人々がその物語を覚えている限り、999とメーテル、鉄郎の旅は永遠に続くのだろう。そしてメーテルは、母の面影とやさしさを宿した憧れの美女のまま、これからも我々の心の中にあり続けるに違いない。

999の旅路で出会った母たち

鉄郎とその母以外にも『999』には母子をテーマにしたエピソードが数多く描かれている。中でも印象的な3つのエピソードを紹介しよう。

「タイタンの眠れる戦士」宇宙戦士の母

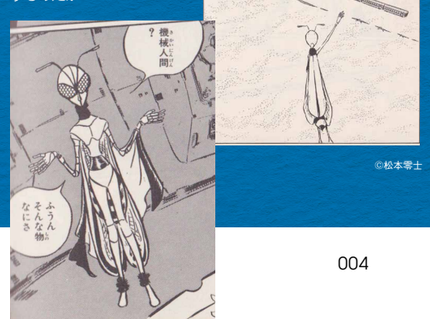
土星の衛星タイタンで知り合った老婆から、帽子と銃をもらう鉄郎。劇場版で、この老婆こそ「戦士の銃」の製作者、大山トチローの母であったことが判明する

「透明海のアルテミス」アルテミスの母

999の軌道上に現れた謎の障害物。それは星そのものが母として小さな命を生み出す不定形の生命体であった。テレビ版は通常放送後、2時間枠の特別編として再編された

「終わりなき夏の物語」女王シャーブス

ヒト型の昆虫が支配する星に君臨する女王。999は昆虫たちのエサとなるべく繭で包まれてしまい、その内部には昆虫の赤ん坊が大量発生するのだが…

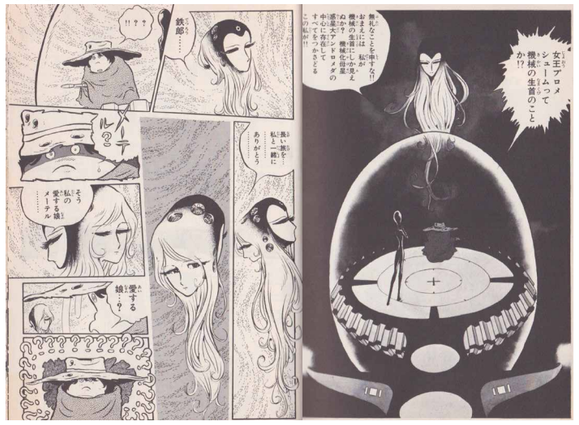


©松本零士

幻影でもお化けでもいいから絶世の美女を描きたかった。

•Profile 松本零士／まつもとれいじ
昭和13年、福岡県生まれ。本名・晟（あきら）。高1の時に『漫画少年』掲載の『蜜蜂の冒険』でデビュー。卒業後にプロのマンガ家を目指して上京し、当時の下宿生活をもとにした『男おいどん』が1971年にヒット。その後『宇宙戦艦ヤマト』『銀河鉄道999』『宇宙海賊キャプテンハーロック』など名作を次々と発表する。旭日小綬章、紫綬褒章、フランス美術文化勲章シュバリエ受賞

©松本零士



終着駅、惑星大アンドロメダで待っていたのは、メーテルの母にして機械帝国の女王、プロメシュームだった。娘を自分の所有物のように扱う彼女は、今で言う〝毒親〟の元祖?

駅に佇む美女を鉄郎が母と間違えるところから物語は始まり、メーテル=母を印象づける。そして駅は別れの場ともなるのだ

りんたろう監督の手で全編リメイクされた映画版『999』。鉄郎との別れの際、メーテルは長いキスをする。「俺もメーテルを守れるような男になる!」と、観客の少年たちは誓った

©松本零士・東映アニメーション

Sample